
黒き鳥、白き蝙蝠

龍川歌風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒き鳥、白き蝙蝠

【Nコード】

N2911E

【作者名】

龍川歌風

【あらすじ】

ユーリと黒ユーリ（勝手に名前付けちゃってますが・・・）の出会いのお話。だいぶオリジナル要素が強いのでそれでも良いという方のみお読み下さい。

あの国には純粋な心の持ち主しか住んでいない。

逆を言えば、【そう】でない者は存在する事すら許されない。

だから俺は落とされたのだ。あの雲の切れ間から。

あの国は正義と公正と、平和の象徴。

彼の王はとも^かも優しくかった。でもだからこそ、同時に誰よりも厳しい存在だった。

俺は“悪”だったから。

たくさん^かの者を傷つけて、苦しめて、不幸をばらまいたから。落とされて当然だ。

それにきつと、この漆黒の髪はあの光の国には似付かわしくなかったし、この深く濃い、蒼の瞳と翼はあの空の色からは遠すぎた。

だから、これで良かったのだ。誰を恨む事もない。“悪い”のは、全部この俺なのだから——。。。。。。

「ほう、貴様、あの樂園から落とされた墮天使か。しかもこの私に酷似しているとは。。。。。。面白い」

「!？」

漆黒の青年の前に現れたのは、自分と瓜二つの容姿の、けれど正反対の色を持つ男。

彼の肌は雪のように真っ白で、その髪はうっすらと空の色を帯びている。

（俺よりよほど天使らしいな）

あくまで彼のその、血に染まったように紅い瞳と翼以外は、だけ
れど。

「……俺に何か用か？」

「用が無ければ話し掛けたりはしないさ。……単刀直入に言
う。貴様、私の同胞になる気はないか？」

「何……？」

白き男の意外な言葉に、漆黒の青年は眉をひそめた。

「我が一族は異質なる血吸いの種族。また我らには特殊な能力があ
り、自身の血を分け与える事により、他種の者を血族として取り込
むことができるのだ」

「……そんな事をして、お前に一体何の得がある？なぜ、
俺なんだ……？」

「……別に深い意味などないさ。ただそろそろ我が城にも使用
人が欲しいと思った。そうしたら丁度お前がいた。それだけだ」

白き男はしれっとして答えた。

—————ああ、そうか。

こいつは別に“俺”という存在を選んだわけではなかったのか・
・・。

他人に関心なんてない。本当は目の前で誰が死のうが、生きよう
が、関係ない。

けれど人一倍好奇心旺盛だから、珍しいものにはつい手が伸びて
しまう。

ただそれだけ。

本当にただの気まぐれだったのだ。それ以上でも、それ以下でも
ない。

そういう顔をしている。

どこまでも齒にきぬ着せぬ奴——・・・。

「…………でもだからこそ、彼が偽善めいた言葉を口にすることは一切ないだろう。」

嘘偽りを語ることもないだろう。

俺を騙し、裏切ることもないだろう。

「…………俺を捨てたりもしないだろう、あの樂園と違って。」

だから——…………。

「…………いいだろう。お前の同胞でも配下でも、何でもなってる。…………お前、名は？」

「我が名はユーリ。ここより遙か北方に住まいし、宵闇の民————」

言いながら、ユーリは自身の手首に鋭い牙を突き立てた。そこから紅く鮮やかな血が滴り落ちる。

そしてその雫の一粒が、黒き青年の口の中へと落ちてゆく。

途端に激痛が青年の全身を駆け巡った。また体が焼けるように熱い。

姿が変容する。俺が俺でなくなってゆく——…………。

青年がようやく苦しみから解放されると、犬齒は鋭く伸び、鳥のような羽根は今やその一枚一枚が融け合い、一對の蝙蝠の翼へと変じていた。

そんな青年の変化をユーリは興味深そうに眺め入る。

「ほう、こうして見るとますます私に似てくるな……。それで、貴様の名は何という？」

すると青年は瞳を曇らせ俯いた。

「今は……ない。天使だった頃の名は、落ちた時に捨てたから……」

「そう、か……では何と呼べばいい？」

「——『ユーリ』でいい。俺はお前の対であり、影だから——お前と同じ、『ユーリ』でいい……」

しかし自分の名を、ましてや自分と同じ顔の者に対して使うというのは、あまり気分の良いものではない。

ユーリは口を手を当ててしばらく思索すると、言った。

「では『アーテル (A t e r)』というのはどうだ？ 黒を意味する名だ」

アーテル

黒——それは青年の髪の色であり、影の色であり、夜の色だ。

この青年にこれほど似合う名はあるまい。

「『アーテル』、か……。良い響きだな……。よし、いいだろう。今この時より、俺の名は『アーテル』だ」

本当は呼び名なんてどうでも良かったのだけれど。

主が考え、付けてくれた。

その事がなんだか無性に嬉しかった。

「気に入ったようで何よりだ。——さて、もうじき日が沈むな……。したらば羽慣らしにひとつ、月夜の散歩にでも行くとするか」

お前にはまばゆき陽光よりも、淡く儂い月光のほうがよく似合うから。そう呟いて。

こうして天から舞い降りた黒鳥は、白き蝙蝠に誘われ、夜の世界へとはばたいていった。

ユーリがバンドを作る遙か昔の、かつ、彼が長き眠りに落ちるほんの少し前の、とある日のある出来事であった――・・・・・。

（後書き）

お読みくださりありがとうございました。

ちなみにA t e rというのはラテン語だそうです。

感想などいただけたら嬉しいです。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2911e/>

黒き鳥、白き蝙蝠

2011年1月9日03時25分発行